

# 主イイススハリストスの降誕祭聖体礼儀

## 単音聖歌譜



### 司祭祈禱

注意 譜面中、五線譜上に **||o||** とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞(祈禱文)が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないようにしてください。

2023年12月11日 改訂  
釧路ハリストス正教会  
管轄司祭ステファン内田圭一

司祭) ( 黙誦: 天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者

よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を

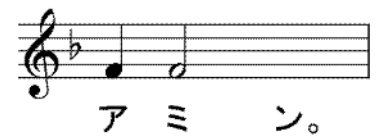
もろもろの穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。

至と高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、至と高き

には光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、

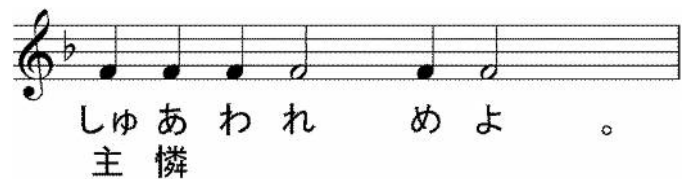
主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす、 )

司祭) 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世に、



### 【 大聯禱 】

司祭) 我等安和にして主に禱らん、



司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、



司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリス



トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



司祭) 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び  
彼等の救の爲に主に禱らん、



司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



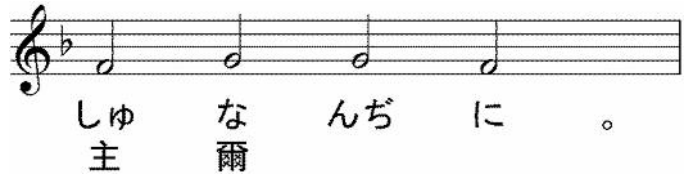
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



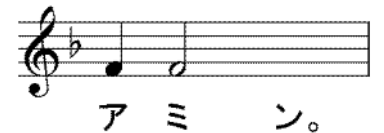
司祭) ( 黙誦: しゅわ かみ なんぢ けんべい かたど がた こうえい はか がた なんぢ じんじ かぎ  
主我が神よ、爾の權柄は像り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限り

なく、仁愛は言い難し、求む主宰よ、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の

せいどう かねり われらおよ われら とも いの もの なんぢ ゆたか おんたく なんぢ  
聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豊なる恩澤と爾の

あいれん ほどこ たま  
愛憐とを施し給え、 )

司祭) けだし およ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【 第一アンティフォン 】

しゅよ、われこころをまっとうしてなんぢをさんえい  
主 我 心 全 爾 讚 榮  
し、なんぢがことごとくのきせきをつたえん。  
爾 悉 奇 迹 傳  
きゆうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって  
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因  
われらをすくいたまあえ。  
我 等 救 給  
ぎしゃのしゅうぎのうち、およびそのかいのうち  
義 者 集 議 中 及 其 会



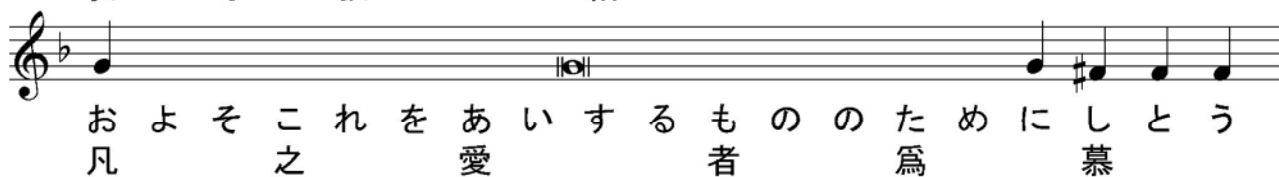
に お い て し ゆ の し わ ぎ は お お い な り 。  
於 主 所 爲 大



き ゆ う せ い し ゆ よ 、 し ょ う し ん ぢ ょ の き と う に よ っ て  
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因



わ れ ら を す く い た ま あ え 。  
我 等 救 給



お よ そ こ れ を あ い す る も の の た め に し と う  
凡 之 愛 者 の た め に 慕



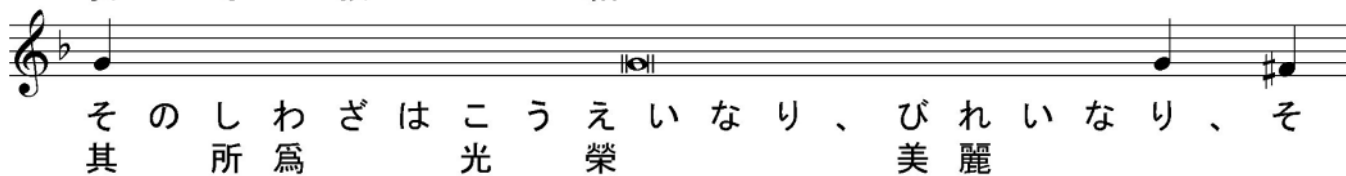
べ し 。



き ゆ う せ い し ゆ よ 、 し ょ う し ん ぢ ょ の き と う に よ っ て  
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因



わ れ ら を す く い た ま あ え 。  
我 等 救 給



そ の し わ ぎ は こ う え い な り 、 び れ い な り 、 そ  
其 所 爲 光 榮 美 麗



の ぎ は な が く そ ん す 。  
義 永 存



き ゆ う せ い し ゆ よ 、 し ょ う し ん ぢ ょ の き と う に よ っ て  
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因



わ れ ら を す く い た ま あ え 。  
我 等 救 給

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
何 時 世 世

き ゅ う せ い し ゅ よ 、 し ょ う し ん ぢ ょ の き と う に よ っ て  
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因

わ れ ら を す く い た ま あ え 。  
我 等 救 給

【 小聯禱 】

司祭) <sup>われらまたまたあんわ</sup>我等復又安和にして<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup>至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

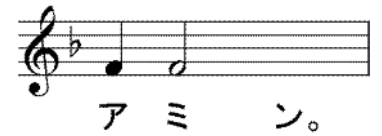
<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup>  
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の  
<sup>いのち もつ かみ いたく</sup>  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な ん ぢ に 。  
主 爾

司祭) ( 黙誦: <sup>しゅわ かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎやう ふく くだ なんぢ きやうかい</sup>主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の

<sup>じゅうまん まも なんぢ どう び あい もの せい なんぢ しんせい ちから</sup>  
充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を  
<sup>もつ かれら こうえい われらなんぢ たの もの のこ なか</sup>  
以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、 )

司祭) けだしけんべいおよ くに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋 權柄 及び 國と 權能と 光榮は 爾 父と子と 聖神に 歸す、 今も何時も 世に、



【 第二アンティフォン 】

かみをおそれ、そのいましめをきわめてあい愛  
神畏 其誠 極 愛  
するひとはさいわいな り。  
人 福  
どうていぢょよりうまれしかみのこよ、わ我  
童貞女 生 神 子 我  
れらなんぢにアリライヤをうたうものをすく  
等 爾 歌 者 救  
いたま あ え  
給  
そのすえはちにちからあり、せいちよくのもの  
其裔 地 力 正 直 者  
のぞくはしゆくふくせられん。  
族 祝 福  
どうていぢょよりうまれしかみのこよ、わ我  
童貞女 生 神 子 我  
れらなんぢにアリライヤをうたうものをすく  
等 爾 歌 者 救

いたま あ え  
給

とみとたからとはそのいえにあり、そのぎは  
富財其家其義

ながくそんす。  
永存

どうていぢょよりうまれしかみのこよ、わ  
童貞女生か神の子よ、わ我

れらなんぢにアイルイヤをうたうものをすく  
等爾歌者者救

いたま あ え  
給

せいちよくのもののためにひかりはくらやみの  
正直者爲光闇冥

うちにいづ、かれはいつくしみありめぐみあ  
中出彼慈あり恵

りてぎなるものなり。  
義者

どうていぢょよりうまれしかみのこよ、わ  
童貞女生か神の子よ、わ我

れらなんぢにアイルイヤをうたうものをすく  
等爾歌者者救



いたま あ え  
給

【 神の獨生の子 】

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
何 時 世 世

か み の ど く せ い の こ な ら び に こ と ば よ 、  
神 獨 生 子 並 言

し せ ざ る も の に し て わ れ ら を す く わ ん が た め  
死 者 我 等 救 爲

あ ま ん じ て せ い な る し ょ う し ん ぢ ょ ・ え い て い ど う ぢ ょ  
甘 聖 生 神 女 永 貞 童 女

マ リ ヤ よ り み を と り 、 か み の せ い を か え  
身 取 神 性 易

ず し て ひ と と な り じ ゅ う じ か に く ぎ う た れ 、  
人 十 字 架 釘

し を も っ て し を ふ み や ぶ り し ハ リ ス ト ス か み よ 、  
死 以 死 踏 破 神

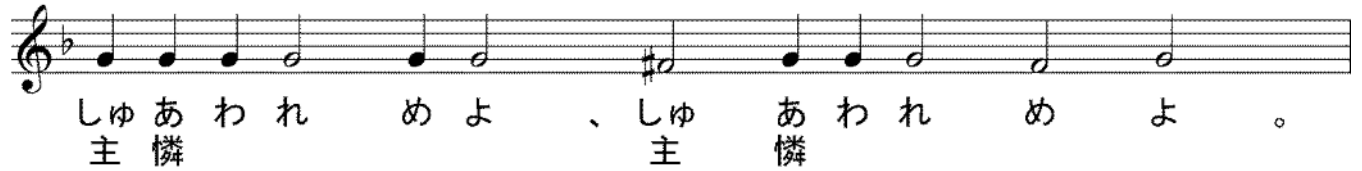
せ い さ ん し ゃ の い つ と し て ち ち と せ い し ん と と  
聖 三 者 一 父 聖 神 共

も に さ ん え い せ ら る る の し ゅ よ 、 わ れ ら を す  
讚 榮 主 我 等 救



【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの  
我等復又安和にして主に禱らん、

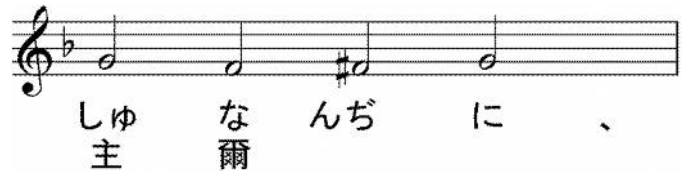


司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ( 黙誦: われら こ こうどうわごう きとう たま かつ にさんにんなんぢ な よ あつ もの  
我等に此の共同和合の祈禱を賜い、曾て二三人爾の名に依りて集まる者に

そのもと ところ たま やく しゅ なんぢみづか いま なんぢ しょぼく ねがい その  
も其求むる所を賜うを約せし主よ、爾親ら今も爾が諸僕の願を其

りえき ため かな われら こんせ なんぢ しんり し らいせ えいえん  
利益の爲に應わしめて、我等に今世には爾の眞理を識り、來世には永遠の

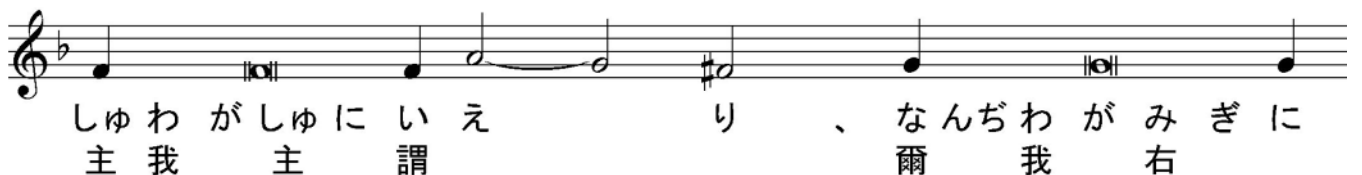
いのち え たま  
生命を得るを給え、 )

司祭) けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま  
蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も

いつ よよ  
何時も世に、



【 第三アンティフォン 】



ざせよ。  
坐

ハリストスわが か み よ、 なんぢの こうたんは せ か  
我 神 爾 降 誕 世 界

いにち えの ひかりを てらせ り、 これによ  
智慧 光 照 此 由

りて ほしに つとむ るものは ほしにおしえ  
星 勤 者 星 教

られて、 なんぢぎの ひをおが あみ、  
爾 義 日 拝

なんぢう えよりの ひがしを さとれ り。  
爾 上 東 覚

しゅよ、 こう えいは なんぢに きす。  
主 光 榮 爾 歸

わが なんぢの て きを なんぢの あしの だいと  
我 爾 敵 爾 足 台

なすにいた れ。  
爲 迄

ハリストスわが か み よ、 なんぢの こうたんは せ か  
我 神 爾 降 誕 世 界

いにち えの ひかりを てらせ り、 これによ  
智慧 光 照 此 由

りてほしにつとむるものはほしにおしえ  
星 勤 者 星 教

られて、なんぢぎのひをおがあみ、  
爾 義 日 拝

なんぢうえよりのひがしをさとれり。  
爾 上 東 覚

しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
主 光 榮 爾 歸

しゅはシオンよりなんぢがのうりよくのつえをつか  
主 爾 能 力 杖 遣

わさん、なんぢはそのてきのうちにしゅたる  
爾 其 敵 中 主

べし。

ハリストスわがかみよ、なんぢのこうたんはせか  
我 神 爾 降 誕 世 界

いにちえのひかりをてらせり、これによ  
智慧 光 照 此 由

りてほしにつとむるものはほしにおしえ  
星 勤 者 星 教

られて、なんぢぎのひをおがあみ、  
爾 義 日 拝



なんぢう えよりのひがしをさとれり。  
爾 上 東 覚

しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
主 光 榮 爾 歸

なんぢがのうりよくのひにおいて、なんぢの  
爾 能 力 日 於 爾

たみはせいなるびれいをもってそなえられた  
民 聖 美 麗 以 備

り。

ハリストスわがかみよ、なんぢのこうたんはせか  
我 神 爾 降 誕 世 界

いにちえのひかりをてらせり、これによ  
智 慧 光 照 此 由

りてほしにつとむるものはほしにおしえ  
星 勤 者 星 教

られて、なんぢぎのひをおがあみ、  
爾 義 日 拝

なんぢう えよりのひがしをさとれり。  
爾 上 東 覚

しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
主 光 榮 爾 歸

司祭) ( 黙誦：主宰・主・我等の神、諸天に天使及び、天使首の品級と軍隊とを立て

なんぢ こうえい ほうじしゃ もの もと われら い ともな か われら  
て 爾 が 光 榮 の 奉 事 者 と な し し 者 よ、 求 む 我 等 の 入 る に 伴 い て、 彼 の 我 等 と

とも つと とも なんぢ しぜん さんえい せいてんしらい いた たま けだし およ  
偕 に 務 め、 共 に 爾 の 至 善 を 讚 榮 す る 聖 天 使 等 の 入 る を 致 さ せ 給 え、 蓋、 凡

こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
そ 光 榮 尊 貴 伏 拜 は 爾 父 と 子 と 聖 神 に 歸 す、 今 も 何 時 も 世 世 に、 )

司祭) えいち つつし た  
睿 智、 肅 み て 立 て、

【 聖入の句 】



わ れ し の の め の ま え に は ら よ り なんぢ を う  
我 黎 明 前 腹 爾 生

め え り、 しゅ は ち か い て く い ず。  
主 誓 悔

なんぢメルキセデクのはんにしたが い て し さい と  
爾 班 循 司 祭

と な り て よ よ に い た ら ん。  
爲 世 世 迄

【 降誕祭のトロパリ 第4調 】



ハリストスわが か み よ、 なんぢの こうたんは せ か  
我 神 爾 降 誕 世 界

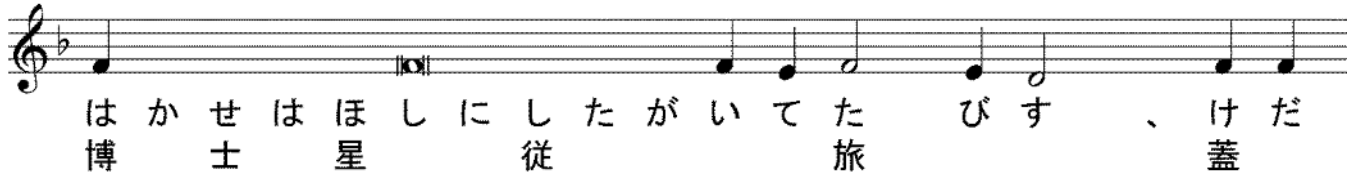
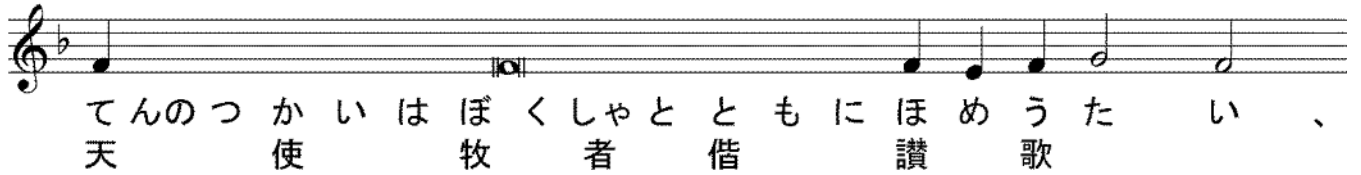
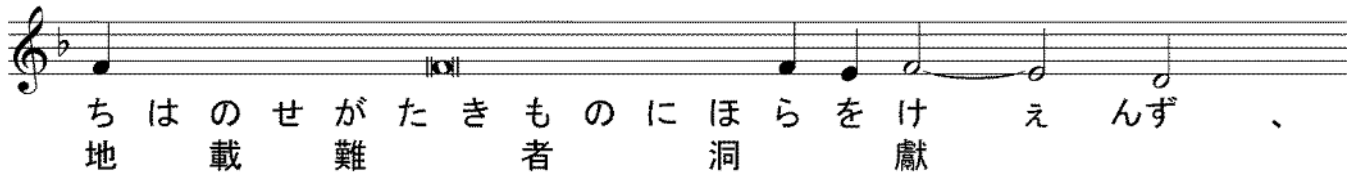
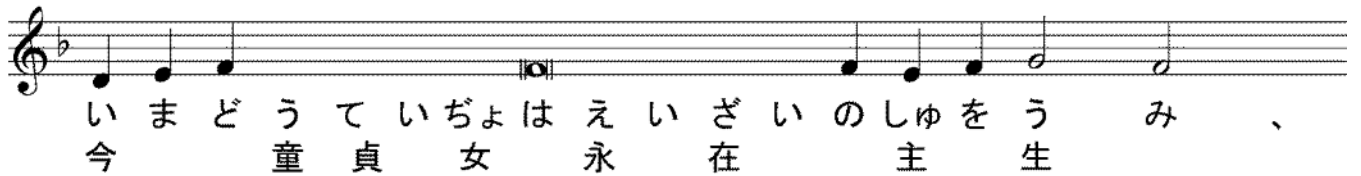
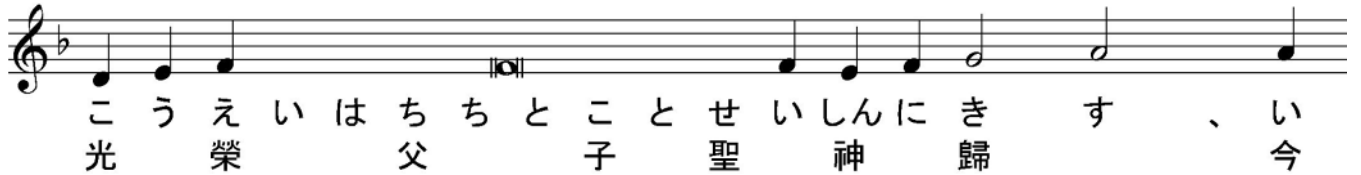
い に ち え の ひ か り を て ら せ り、 こ れ に よ  
智 慧 光 照 此 由

り て ほ し に つ と む る も の は ほ し に お し え  
星 勤 者 星 教

ら れ て、 なんぢぎ の ひ を お が あ み、  
爾 義 日 拝



【 降誕祭のコンダク 第3調 】



司祭) ( 黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拜せられ、 萬物を無より有と





イ ヤ 、 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き  
光 榮 父 子 聖 神 歸  
す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 ハ リ ス ト  
今 何 時 世 世  
ス を き た あ り 、 ア リ ル イ ヤ 。 ハ リ ス ト ス に お 於  
衣  
い て え せ ん を う け し も の ハ リ ス ト ス を き た あ  
洗 受 者 衣  
り 、 ア リ ル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 プロキメン 提綱 第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

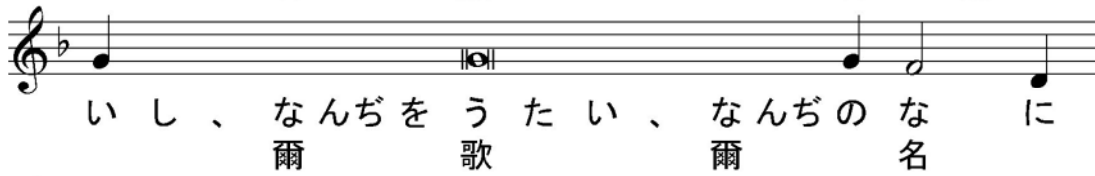
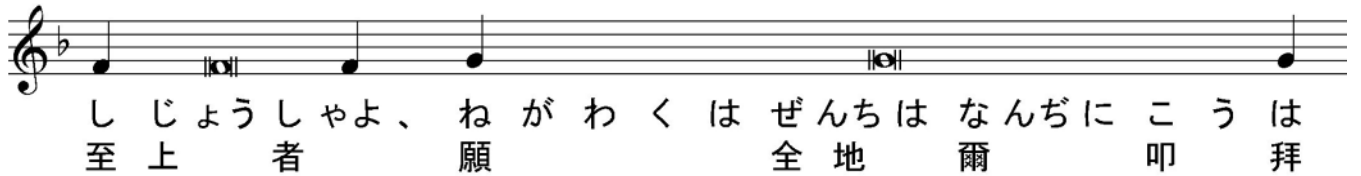
司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、至上者よ、願わくは全地は爾に叩拜し、爾を歌い、爾の名に歌わ  
ん、

し じ ょ う し ゃ よ 、 ね が わ く は ぜ ん ち は な ん ぢ に こ う は  
至 上 者 願 全 地 爾 叩 拜  
い し 、 な ん ぢ を う た い 、 な ん ぢ の な に  
爾 歌 爾 名



誦經) <sup>ぜんち かみ よろこ よ そのな こうえい うた こうえい さんび かれ き</sup> 全地よ、神に 歡 びて呼び、其名の光 榮を 歌い、光 榮と 讚美とを彼に歸せよ、



誦經) <sup>しじょうしゃ ねが ぜんち なんぢ こうはい</sup> 至 上 者よ、願 わくは全地は 爾 に叩 拜し、



【 <sup>アポστόロス</sup> 使 徒 經 209 端 ガラティヤ書 4 章 4～7 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿 智、

誦經) <sup>せいしと じん たつ しょ よみ</sup> 聖使徒パヴェルがガラティヤ人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹 みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい きみ いた かみ そのこ つかわ かれ おんな うま りつぼうか もの</sup> 兄 弟よ、期満つるに至りて、神は其子を 遣し、彼は女より生れ、律法下の者とな  
<sup>りつぼうか もの あがな われら こ え たため かつなんぢらこ よ</sup> れり、律法下の者を 贖い、我等をして子たるを得しめん爲なり。且 爾等子たるに由りて、  
<sup>かみ なんぢら こころ そのこ しん ちち よ もの つか ゆえ なんぢすで ぼく</sup> 神は 爾等の心 に其子の神、「アツヴァ」父を呼ぶ者を遣わせり。故に 爾既に僕なら  
<sup>すなわちこ も こ よ かみ よつぎ</sup> ず、乃 子なり、若し子ならば、イイススハリストスに由りて神の 嗣 なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった。それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「ア

バ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。したがって、あなたがたはもはや僕ではなく、子である。子である以上、また神による相続人である。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 第1調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>しよてん かみ こうえい つた おおぞら そくて しわざ つ</sup> 諸天は神の光榮を傳え、穹蒼は其手の作爲を誦ぐ、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>ひ ひ ことば の よ よ ち ほどこ</sup> 日は日に言を宣べ、夜は夜に智を施す、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思

<sup>ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ  
 を畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ  
 ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ  
 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神  
 なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし  
 よ、爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至  
 ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ  
 善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書3端 2章1~12節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん  
 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) でん せいふくいんけい よみ  
 マトフェイ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮  
 はなんぢにきす。  
 爾 歸

司祭) つつし き おう とき うま み はか  
 謹みて聴くべし、イイススはイロド王の時イウデヤのヴィフレムに生れしに、視よ、博

せすにんひがし きた いわ うま じん おう いづこ あ けだし  
 士數人 東よりエルサリムに來りて曰く、生れたるイウデヤ人の王は何處に在るか、蓋

われらそのほし ひがし み かれ はい ため きた おうこれ き ころさわ  
 我等其星を東に見たれば、彼を拜せん爲に來れり。イロド王之を聞きて心騒げり、

いエルサリム ころさわ ころさわ ころさわ ころさわ ころさわ ころさわ  
 イエルサリム舉りて亦然り。乃凡の司祭長と民間の學士とを集めて、彼等に問え

り、ハリストスは何處に生るべきか。彼等曰えり、イウデヤのヴィフレムに於てす、蓋預言

者に因りて斯く録されたり、云く、イウダの地ヴィフレムよ、爾はイウダの諸郡の中に於

て聊も小しとせず、蓋爾より我が民イズライリを牧せんとする君は出でんと。是に

於てイロド密に博士を召し、詳に星の現れし時を問い、彼等をヴィフレムに遣

して曰えり、往きて、細に嬰兒の事を尋ね、之に遇わば、我に告げよ、我も往きて彼を拜

せん爲なり。彼等王に聞きて往けり、視よ、嘗て東に見たる星は彼等に先だちて行き、遂



おさなご あ ところ いた そのうえ とどま かれらほし み よろこび た すなわちいえ  
に嬰兒の在る所に至りて、其上に止れり。彼等星を見て喜に勝えざりき。乃家

い おさなご そのはは とも あ み ふふく かれ はい そのたからばこ ひら これ  
に入りて、嬰兒の其母マリヤと偕に在るを見、俯伏して彼を拜し其寶盒を啓きて、之

れいもつ けん すなわちおうごん にゆうこう もつやく すで ゆめ うち かえ  
に禮物を獻じたり、即黄金、乳香、沒藥なり。既にして夢の中に、イロドに戻る

べ つげ え た みち そのほんち かえ  
可からずとの黙示を得て、他の途より其本地に歸れり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拜みにきました」。ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であった。そこで王は祭司長たちと民の律法学者たちとを全部集めて、キリストはどこに生れるのかと、彼らに聞いた。彼らは王に言った、「それはユダヤのベツレヘムです。預言者がこうしるしています、『ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さいものではない。おまえの中からひとりの君が出て、わが民イスラエルの牧者となるであろう』」。そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、星の現れた時について詳しく聞き、彼らをベツレヘムにつかわして言った、「行って、その幼な子のことを詳しく調べ、見つかったらわたしに知らせてくれ。わたしも拜みに行くから」。彼らは王の言うことを聞いて出かけると、見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった。彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。そして、家にはいって、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拜み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・沒藥などの贈り物をささげた。そして、夢でヘロデのところに帰るなどのみ告げを受けたので、他の道をとおって自分の国へ帰って行った。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン) へ